

健康

医療と介護 一体的に提供

「自宅で最期まで」新潟の医師が甲府で講演

「病気になったら病院に行けばいいと考える時代は終わった」。

医療と介護を一体的に提供し、みとりまで支える在宅療養支援診療所・緩和ケア診療所「斎藤内科クリニック」(新潟市)院長の斎藤忠雄さんは、「地域包括ケアシステム」の必要性を強調する。ホスピス・在宅ケア研究会やまなし(内藤いづみ代表)が甲府市内で開いた拡大定例会で、「みとり」をとおして『いきる』を考えるー住み慣れた地域で生きていくーと題し、1人暮らしでも家で最期まで過ごすことができる仕組みづくりについて語った。

高齢の夫婦2人や1人暮らしが増え、介護やみどりの場が問題になっているが、「沖縄と東京を除き2030年をピークに高齢者は減る。特別養護老人ホームを増やすのは現実的ではなく、これからは地域包括ケアが重要になる」と斎藤さんは考える。

地域包括ケアは、高齢者が可能な限り住み慣れた地域で自立した生活を送るため、医療や介護、介護予防、生活支援、住まいとい



「住み慣れた家で最期まで生きる方法がある」と語る斎藤忠雄さん
＝甲府・県立大池田キャンパス

った資源を集めて統合するという考え方。それぞれのサービス提供者が考え方を一致させることが重要といい、24時間365日切れ目なくサービスを提供する。当初は

高齢者を対象にした仕組みだったが、今は障害者や子ども、障害のある困窮者、若年性認知症者、ひきこもりの人、難病やがん患者も対象となり、「皆さんを地域の中で守っていく仕組みが地域包括ケア」と説明する。

地域包括ケアをつくる上で、斎藤さんが重要と考えるのが、看護小規模多機能型居宅介護。利用者の自宅を中心に、通所、宿泊、訪問介護、訪問看護を一体的に、24

時間365日提供するサービスで、利用者のニーズに合わせてサービスを組み合わせられる。多様なニーズに応えることができ、看護が入ることで医療面の対応もできる。

斎藤さんも看護小規模多機能型居宅介護事業所を運営する。100歳の男性は、通所や訪問サービスを利用しながら、庭の草むしりを口課に自宅で1人暮らしを続けているという。「地域の中に医療と介護を切れ目なく受けられる仕組みをつくることで、自宅で最期を迎えられることを知ってほしい」